研究ノート

『論語』講読 ― 「学而第一」三

玉木　尚之

An Interpretation of the Third Paragraph in "Analects of Confucius" , 'Xue Er, the First Chapter'

Naoyuki TAMAKI

Research and Education Faculty Humanities and Sociology Cluster Humanities and Sociology Unit

This paper does not intend to give new interoretations of "Analects of Confucius" ,but tries to give a presentation showing the grounds for interpretation. I have tried to interpret the third paragraph in 'Xue Er, the Fist Chapter'

はじめに
一・三　「学而第一」三
一・三・一　漢和辞典による解釈
一・三・二　諸訳書に見る解釈
一・三・三　用例による検討
一・三・三・一　「仁」
一・三・三・二　「巧言令色」
一・三・三・三　「仁」とことば
一・三・三・四　外貌に対する態度
一・三・四　「学而第一」三のまとめ

はじめに

小稿は、「『論語』講読のために ― 方法と「学而第一」一の解釈」（二〇一〇）（注一）に続き、『論語』の「学而第一」三の解釈を提示するものです。論述の主眼は、必ずしも『論語』についての新しい解釈を提示するということにはありません。主眼は、『論語』をその用例に根拠を求めて読む、その過程を明示すること、その示し方そのものにあります。

前稿では、読者の対象を大学での講読を受講する学生としていましたが、特に区別する必要はないと判断し、本稿からは一般の読者を想定して記述を進めます。一般的な読者が『論語』を読むという場合、専門家の訳書によって読むのが普通でし

ようが、それらには必ずしもなぜそのように読めるのかの記述がありません。そこで、そういう読者にできるだけ寄り添いながら、根拠をもって解釈する過程を示すことを試みるということです。

解釈の態度と方法については、前稿に詳しく記したので、ここでは要点のみ再掲しておきます。

解釈のための方法は極めて基本的なものです。

・岩波文庫『論語』（金谷治訳）（注二）をテキストとして、訓読・口語訳等で概要を知る
・漢和辞典（注三）で語の一般的意味を確認
・諸訳（注四）を参観して意味の概要や翻訳の相違などの問題点を概観
・『論語』における語の用例や関連発言を参考に、訳出すべき語の意味の吟味
・注釈や他の古典は基本的に参照しない（それらによる『論語』解釈の妥当性は、結局『論語』の用法によって吟味するしかないからです）

ただし、論述の形式は、試行錯誤もあって前稿とは異なるものとなっています。

以下、「学而第一」の第三章を解釈します。テキストである岩波文庫の参照章については、篇名・篇中の章順・頁数を記します。ただし、常用漢字に変更し、句読点や書き下し文も適宜変更している場合があります。参照の章で詳しい解釈がとりあえずは必要ないとみなした箇所は、通常の読みに従ったり、またあえて意味をあいまいなままにして訓読する場合もあります。

一・三　「学而第一」三

子曰、巧言令色、鮮矣仁。（二一頁）

子曰わく、巧言令色、鮮し仁、と。

金谷訳「ことば上手の顔よしでは、ほとんど無いものだよ、仁の徳は。」

同文が「陽貨第十七」十七（三五四頁）にも見えます。「巧言」と「令色」について、「鮮」である、「仁」が、と転倒表現で述べています。

一般的読者に寄り添ってと述べましたが、そういう意味では岩波文庫は簡潔で、読者の読書力に委ねる姿勢が強く、必ずしも適切ではないのかも知れません。原文のことば以外にはほぼ補足がないため、理解はかなり難しいでしょう。

ならば、読者はどうするでしょうか。他の訳を参照するという方法もあるでしょうが、それは後回しにして、やってみることができるのは漢和辞典を使ってこの口語訳を確認してみることでしょう。

一・三・一　漢和辞典による解釈

まず「巧言」です。『新字源』で見ると、「巧」の項に『論語』のこの章を出典に「巧言令色」の四言（字）熟語を載せ、「口先じょうずで、顔色を和らげて人にこびへつらう」とあります。つまり、「口先じょうず」が「巧言」の意味とされています。親項の「巧」を見ると、「たくみ（である、にする）」という意味があります。「たくみ」は決して否定的な意味ではありませんが、それが作為として否定的に捉えられる場合があるので、「いつわり」といった意味も帯びるのでしょう。「巧言」の「言」はことばですから、この熟語を修飾・被修飾関係と取れば「巧みなことば」となり、述語・目的語関係と取れば、「ことばを巧みにすること」となります。『論語』のこの章の「巧言令色」は否定的な含意で解されていますが、この辞書ではその理由はわかりません。

これはあまり一般的ではないかも知れませんが、図書館などで『大漢和辞典』を利用できる場合は、いくつかの用例が引かれて解釈が示されるので、小稿で後に行う用例による検討が先取りできることがあります。「巧」を引くと、熟語に「巧言」の項があり、さらにその子項に「巧言」を用いた表現をいくつか掲げています。これまでの流れとの関係で先に「巧言令色」の項を見ると、「たくみにしゃべり、顔色を善くして、こびへつらふ」とあり、『論語』のこの章と別の古典のひとつの用例を挙げています。その用例を理解していくのはまたずいぶんの手間がかかることなので、「巧言令色」を否定的に解する理由を知るのは容易ではなさそうです。

そこで親項としての「巧言」を見ると、古い古典のいくつかの用例を挙げて、「たくみに飾って実のない言葉。いつはりつくろふことば。又、言葉をつくろひ飾る」とのみ解しています。これによると、「巧言」は通常否定的に用いられたようです。

何より注目すべきは、「巧言令色」とは別の子項に「巧言乱徳」が立てられていて、この出典が『論語』（衛霊公第十五・二七　岩波文庫三一七頁）の孔子の発言であることです。それを「巧言は徳を乱る」と訓し、「たくみな言葉は是非を変乱するから道徳を乱す」と解釈しています。解釈の細部の妥当性はさておき、ともかく、『論語』に孔子が「巧言」を否定的に捉えている証拠がここでは得られるわけです。

次に「令色」です。先ほどの『新字源』の「巧言令色」の「顔色を和らげて人にこびへつらう」の部分が「令色」にあてられた意味です。「令」の項にも熟語の「令色」が子項として立てられていて、ほぼ同様の意味が記されていますが、別に「やさしく美しい顔」という相反する意味も書いてあります。「令」の単独の意味を見ると、「こびる」といったような意味は見えません。「和らげ」にあたると思われる「よい」があるのみです。「色」は「かおいろ」「かおつき」で、「言」に対置される「表情」と理解されます。従って、「令色」はもともとは熟語として修飾・被修飾関係と取れば「よい表情」、述語・目的語関係なら「表情をよくすること」などという意味だと考えられます。これがなぜ否定的な意味になるのかの理由はここではわかりません。

こちらも『大漢和辞典』を見てみましょう。「巧」項の「巧言令色」に記された「令色」の意味は『新字源』とほぼ同じでした。「令」の子項の「令色」では、『新字源』同様、「顔色をよくする」という肯定的な意味と「こびへつらって人の意を迎へる」という否定的な意味を分けて記していて、否定的な意味での用例はやはり『論語』のこの章です。親項の「令」の意味にはこれも『新字源』と同じく否定的なものを記しません。

つまりここまでは、「令色」を否定的な意味に取る根拠は、肯定的にも用いられる「巧言」について孔子が『論語』の別の章で明確に否定的に言及していて、今のこの章でそれと「令色」が並置されていること、それだけということになります。

次に先に「仁」を、これはなかなか捉えるのが大変な概念ですが、とりあえず簡単に見ておきましょう。

『新字源』を見ると、名詞の意味としては「したしみ」「いつくしみ」「なさけ」「おもいやり」などが挙げられています。文脈上でどのような和語にあてるかがなかなか難しいので、多くの語が対応させられます。それでうまくいかない場合も多いので、「じん」とそのまま漢語音で使ってもきました。『新字源』にある「儒教における最高の徳」「人道の根本」といった説明は、その用法に対する解説と見てよいでしょう。用例による確認と、この文脈でどの訳語を選択すべきかの検討は後で行います。上の説明にあるように、儒家の文献ではこの語は肯定的な語です。

「鮮」は、述語としての意味には「あざやか」とか「すくない」などがあげられています。ですから、「巧言令色、鮮なり、仁」という表現をそれだけで解するならば、実は通常行われている「巧言令色は、少ないよ、仁が」という解釈とは別に、「巧言令色は、あざやかなことよ、仁が」という全く相反する発言のように解せないこともありません。「巧言」「令色」は肯定的意味にもなるのですから。

しかし、「巧言」が孔子によって否定的に言及されるものであること、だから並置された「令色」も否定的意味と見るべきこと、また「仁」が儒家にとって肯定的概念であること、とりあえず辞書で確認し得たそれらによって、この「鮮」は「すくない」と解すべきであると言えるでしょう。その妥当性は、後にそれらの語の『論語』における用法をさらに検討することで確認します。

以上、漢和辞典を引くことで、とりあえず「口先じょうずで顔色を和らげて人にこびへつらうこと（あるいはそういう人物）は、少ないよ、仁（したしみ、いつくしみ、なさけ、おもいやり）が」というような意味までたどり着けました。金谷訳よりは少し詳しいと言えましょう。しかし、「巧言」「令色」がそのような含意であることはどうしてわかるのか、また、そのような含意だとしてなぜそうだと「仁」が少ないのか、そもそも「仁」の含意は辞書のそれらでいいのか、など、相変わらず疑問がいっぱいです。諸訳者たちがそれらに答えてくれるでしょうか。

一・三・二　諸訳書に見る解釈

短い章ですので、金谷訳以外のいくつかの諸訳注をひととおり掲げましょう。

吉川「巧妙な、飾り過ぎた言葉、たくみな顔色、という事柄、乃至は、そういう事柄をもつ人物の中には、仁、真実の愛情、の要素は少ない」（吉川、上二七頁）

加地「〔他人に対して人当たりよく〕ことばを巧みに飾りたてたり、外見を善

人らしく装うのは〔実は自分のためというのが本心であり〕、〈仁〉すなわち他者を愛する気持ちは少ない」（加地　一九頁）

吉田「口先がうまくて、顔つきを飾る人には、めったに真実心は存しないものだなあ」

語釈

「巧言」巧は好で、口先がうまくてお世辞をいうこと。人の意を迎えて言葉を飾る。

「令色」令は善で、顔色を善くして、努めて人の気に入るような顔つきをすること。

「仁鮮矣」人の本心の徳たる真実心はほとんど無いといってよいの意。（吉田　一七～一八頁）

宇野「言葉を巧みにし、外貌を飾って人を悦ばせようとすると、己の本心の徳がなくなってしまうものである」

語釈

「巧言」巧みに言辞を弄して人を悦ばせるのである。

「令色」顔色を善くするの意。おかしくもないのに笑ったりして人に諂うのをいう。（宇野　一八頁）

木村「お上手を言ったり愛相よく取りつくろったりでは、さっぱりだね、人間味となると」

語釈

「巧言令色」誠実さの無い口先だけの巧みな言葉と、うわべだけの愛相のよさ。

「仁」孔子は、人間は人間自身の本性に従って人間的に生きる外はないから、最も人間らしく生きることが最もよいことだと考えていた。この意味で仁は、人間らしさの極致・真の人間味、等々、随時に訳してよい。（木村　一〇～一一頁）

貝塚「弁舌さわやかに表情たっぷり。そんな人たちに、いかにほんとうの人間の乏しいことだろう」

語釈

「巧言令色」巧言は巧みな弁舌、令色はゆたかな表情。しばしばお世辞とか媚とか訳されるが、これは誤訳である。お世辞や媚とわかっているものには大害はない。その見えないところが曲者なのである」（貝塚　一二頁）

「巧言令色」に対する訳語や語釈を抜き出すと、金谷の「ことば上手」「顔よし」や貝塚の「弁舌さわやか、巧みな弁舌」「表情たっぷり、ゆたかな表情」のようにそれだけでは否定的なニュアンスに取れないものと、「巧」「令」の否定性を出すために、それが「口先」「お上手」「飾り」「取りつくろい」に過ぎないと表現を工夫したり、他者に気に入られようとする意図を付加したりしているものに大別できるでしょうか。金谷が意図的にそのようにしているのかどうかはわかりませんが、貝塚は語釈で「お世辞」「媚び」という訳語を、意図が明瞭すぎるものでは害がないからと批判しているので、敢えて否定的なニュアンスを消したのかもしれません。その妥当性はともかく、貝塚も「巧言令色」を虚飾と捉えているのは共通と見てよいでしょう。

「仁」については、金谷はそのまま、吉川と加地がニュアンスの相違はあるものの「愛」で共通。吉田の訳の「真実心」は、語釈に「人の本心の徳たる」が付いているので、宇野と同じく朱子に依ったものかと思われます。木村は、「人間味」と訳す理由について語釈に説明していますが、「仁」を孔子の重視した「人間自身の本性」を示す語とする理由がよくわかりません。あるいはやはり朱子によるのか、また貝塚の「ほんとうの人間」もその類なのでしょうか。

さて、このような訳や語釈を見て、先の漢和辞典によるとりあえずの解釈の疑問が解けたでしょうか。と考えると、辞典にはない解説が多少加わったものの、訳者によって小異もあってむしろ困惑が増してしまう感もあります。訳者たちがなぜそのように訳すのかの根拠がほとんど説明されないことが根本にあるでしょう。もち

ろんそれは、紙幅が限られる訳書というものの制約によるものでしょう。それぞれの訳者たちは、当然に『論語』や関連書の用例を検討し、先人たちの注釈を参照して考察を重ねているはずで、その上で許される限りで解説を加え、考察の結果としての訳や語注を記すしかないわけです。そのため、訳者たちがそう訳す根拠は、読者には大抵は見えず、なぜの疑問を抱く者には何となく割り切れないものになってしまうのです。

そのような疑問を少しでも減らそうと思うなら、『論語』に見える孔子の他の発言を参照して自ら読んでみるしかないのです。以下、この章についてそれを試みましょう。

一・三・三　用例による検討

一・三・三・一　「仁」

「巧言」「令色」は「仁」との関係で発言されていますので、まず『論語』における孔子の「仁」の含意について用例で確認しましょう。「仁」は、孔子にとって最も重要な語のひとつであり、多用されています。用例が多いのはよいことですが、『論語』の孔子の発言はそもそも状況に応じて即時的に発せられたものでありながら、記録としては断片的で背景も不詳な場合が多く、発言の年齢期も不明です。ですから、用例として集めたものには、状況の相違や経年変化などによる変容が含まれるはずですが、それを識別することはほとんどできません。それが、語の意味範囲を絞ることをさらに難しくしてもいるでしょう。もとより大っぱな輪郭をつかむしかないのです。それは確認しておきたいと思います。

まずは、孔子が「仁」を説明的に語った発言を探しましょう。弟子たちが「仁」について尋ね、孔子が答えている問答がその中心にあります。

最初は、「仁」を端的に「人を愛する」ことだと言っている発言です。

樊遅問仁。子曰愛人。……（顔淵第十二・二二　二四二頁）

樊遅仁を問う。子曰わく、人を愛す。……

もう少し続く章ですが、話題はすぐ「知」に移っているので、「仁」についてはこれ以上の手がかりはありません。「愛」は辞書的には「めぐむ」「いつむしむ」「かわいがる」「したしむ」といったような含意です。そのまま「愛する」としてもかまわないでしょう。

「愛」は孔子の発言としていくつか見えますが、その辞書的な意味以上に孔子がそれにこめる含意をうかがえる用例はほとんどないようです。強いて挙げれば次の一例でしょうか。

子張問崇徳辨惑。子曰、主忠信徙義、崇徳也。愛之欲其生、悪之欲其死。既欲其生、又欲其死、是惑也。……（顔淵第十二・一〇　二三三頁）

子張徳を崇くすると惑いを弁ずるとを問う。子曰わく、忠信を主として義に徙るや、徳を崇くするなり。之を愛すれば其の生くるを欲し、之を悪めば其の死するを欲す。既に其の生くるを欲して、又其の死するを欲する、是れ惑いなり。……

「愛する」ことは「悪む」ことに対置され、その対象が生きてほしいと思うことだと見えます。これによれば「仁」は、他者が生きることを妨げるような行為をせず、生きることを育むような行為を及ぼす、あるいは及ぼしたいと思うことというようなことになるでしょうか。

「仁」説明の次例。

仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨。……（顔淵第十二・二　二二五頁）

仲弓仁を問う。子曰わく、門を出ずれば大賓を見るが如くし、民を使えば大祭を承くるが如くす。己れの欲せざる所、人に施す勿かれ。邦に在りても怨む無く、家に在りても怨む無し。……

門を出る、家という私的な領域から社会という場に出ること。そこでは「大賓」、大切な客に接するようにふるまう。民を使う、為政者・役人として民を使役するには、「大祭を承く」、大切な祭祀に従事するようにふるまう。そういう場でどういう風にふるまうことが仁だと言うのでしょう。

それに続く言を見ると、どうやら他者の不快を引き起こすような言動をしない、

丁重に思いやりを以て接することを言うようです。さらに、社会でも家内でも「怨」を無くすることが加えられます。この「怨」も文脈から他者に対する感情と見てよいでしょう。

三つ目の例。

顔淵問仁、子曰、克己復礼為仁。一日克己復礼、天下帰仁焉。為仁由己、而由人乎哉。顔淵曰、請問其目。子曰、非礼勿視、非礼勿聴、非礼勿言、非礼勿動。……（顔淵第十二・一　二二四頁）

顔淵仁を問う。子曰わく、己に克ちて礼に復するを仁と為す。一日己に克ちて礼に復すれば、天下仁に帰す。仁を為すは己由りして、人由りせんや、と。顔淵曰わく、其の目を請い問う、と。子曰わく、礼に非ざれば視る勿かれ、礼に非ざれば聴く勿かれ、礼に非ざれば言う勿かれ、礼に非ざれば動く勿かれ、と。……

「仁」は「克己復礼」であると言います。

『新字源』は、「克」には「たえる」「かつ」といった意味を掲げ、熟語「克己」にこの用例を挙げて、「自分の欲望に打ち勝つ」といった意味とします。しかし、「克己」そのものや「克己」に関わりそうな「克」の用例は他になく、これを「自身の欲望」と明瞭に限定することができるわけではありません。

「復礼」の「復」には、「かえる」「ふむ」といった意味を記し、熟語の「復礼」にはやはりここの用例を引いて、「礼にかえる」「礼により従う」、一説として「礼をふみ行う」とします。

顔淵がさらに細目を質問すると、孔子は「礼」でなければ視聴言動をするなと言っていますから、「礼」に従うことが「復礼」であることはわかります。そして、「克己」についての細説は分けてありませんから、「克己」もまた礼に従うことと一体であるのだと考えてよいでしょう。

『論語』の用例確認によって、「礼」が、王朝・国レベルから個人にいたるまでの社会的な制度・作法であったことが概観できます（玉木、二〇一〇、一一～一二頁）。とすれば、「己に克つ」とは、社会的な規範に従って言動することをよしとし、それを規範として自身の判断を制御するようなことを意味するでしょう。「仁」を語った先の「顔淵第十二」二の「見大賓」「承大祭」は端的に「礼」に従うべき場です。

社会規範に照らして自身の判断を制御し、他者が好ましいように思いやりふるまうこと、そのようなことが、これらの発言からうかがえる「仁」の核心です。

補強のために次の発言を加えておきましょう。

……夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、……。（雍也第六・三〇　一二三頁）

……夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達し、……

「立」「達」の内実は不詳ですが（玉木、二〇一〇、一二頁）、これは、「顔淵第十二」二の「己れの欲せざる所、人に施す勿かれ」の裏返しで、自身の欲することは自身を置いて他者がそうなるようにさせるのが「仁」者の態度だと言っています。

金谷・吉川・加地の訳語「愛」が訳語として必ずしも不適切なわけではありません。しかし、見てきたような内包を表現する一語の訳語を見いだすのは困難でしょう。加地が「他者に対する」を添えているのはそのニュアンスを示す工夫なのでしょう。

一・三・三・二　「巧言令色」

「巧言」と「令色」を並置した用例がもうひとつあります。

子曰、巧言令色足恭、左丘明恥之、丘亦恥之。匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥。（公冶長第五・二五　一〇一頁）

子曰わく、巧言令色足恭は、左丘明之を恥じ、丘（孔子の名、自称）も亦た之を恥ず。怨みを匿して其の人を友とするは、左丘明之を恥じ、丘も亦た之を恥ず、と。

この発言では「巧言令色」が恥ずべきものと明言されています。これによって、今解釈している「学而第一」三の「鮮」が「あざやかである」ではなく、「すくない」であることが確認されます。

因みに、『論語』における孔子の「鮮」の用例は、他に「里仁第四」二三（八一頁）、

「雍也第六」二九（一二三頁）、「衛霊公第十五」四（三〇五頁）に見えますが、全て「少ない」と解釈するのが適切なものです。

ここではさらに「足恭」が並置されていますので、それが「巧言令色」の具体像に迫る手がかりになるでしょうか。残念ながら、他に用例がない「令色」と同じく、この語にも他に用例がありません。「恭」は『論語』に頻出しますが、とりあえず辞書的に「うやうやしい」と見ておくとして、「足」は通常は「たる」「じゅうぶんだ」という意味を持ちます。ここは否定的なニュアンスを帯びるものと見なければなりませんから、「巧」「令」と同様、元来の肯定的な意味が否定的なものに反転していることになります。「巧」「令」が否定的な意味に反転する原因に、先には作為的なものが加わることを想定しましたが、「じゅうぶんである」ことが否定的になるのは、過度であるというようなニュアンスが加わるからでしょうか。そこにも作為の存在は想定できます。孔子は過度に作為的になされる言動を嫌悪したものと思われます。

「巧言」にはもうひとつ発言があります。『大漢和辞典』に見えた用例です。

子曰、巧言乱徳。小不忍、則乱大謀。（衛霊公第十五・二七　三一七頁）

子曰わく、巧言は徳を乱す。小忍ばずんば、則ち大謀を乱す、と。

「徳」もまた肯定的に多用される語で、ここではその詳細には立ち入れませんが、この発言も明瞭に「巧言」批判です。しかし、この発言でも、「巧言」がなぜ「徳」を乱すのかの詳細は不明と言うしかありません。

一・三・三・三　「仁」とことば

作為された巧みなことばがなぜ批判されるのでしょうか。「巧言」の直接の用例二例からは詳細はわからないので、その消息をうかがうための次善策として、孔子の「言」に対する態度がうかがえる発言を探って見ましょう。

まず、「仁」についての問いに応答して「言」に言及した発言です。

司馬牛問仁。子曰、仁者其言也訒。曰、其言也訒、斯可謂之仁已乎。子曰、為之難、言之得無訒乎。（顔淵第十二・三　二二六頁）

司馬牛仁を問う。子曰わく、仁者はその言や訒なり、と。曰わく、其の言や訒なれば、斯れ之を仁と謂う可きか、と。子曰わく、之を為すこと難し、之を言うこと訒なる無きを得んや、と。

「仁」者のことばは「訒」であると述べています。「訒」は『新字源』では「いいなやむ」「ことばがすらすら出ない」、『論語』のこの用例で「しのぶ」「ひかえる」と記します。『論語』に他の用例はありませんので、それで解釈するしかありませんが、含意はまさに「巧言」と相反する発語の有り様と見ることはできます。「訒」である理由について孔子は、「為す」、つまり実行・実践が難しいことを挙げています。言行一致の困難さから、「言」を慎重にひかえめにすべきと考えていたということでしょう。

孔子のそういう態度は、以下のような発言に確認されます。

子曰、古者、言之不出、恥躬之不逮也。（里仁第四・二二　八〇頁）

子曰わく、古の者言を之れ出さざるは、躬の逮ばざるを恥ずるなり、と。

子曰、君子恥其言之過其行也。（憲問第十四・二九　二八九頁）

子曰わく、君子は其の言の其の行いに過ぐるを恥ずるなり、と。

子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、……（学而第一・一四　三〇頁）

子曰わく、君子は食に飽くを求めず、居に安きを求むる無く、事に敏にして言に慎み、……

子曰、君子欲訥於言而敏於行。（里仁第四・二四　八一頁）

子曰わく、君子は言に訥にして行いに敏ならんと欲す、と。

実践が伴わないことをおそれてことばに慎重であるべきことをくり返し語っています。

特に、最後の「里仁第四」二四の「訥」については、今我々が解釈してる「学而

第一」三と対を為すとも見える以下の発言があります。

子曰、剛毅木訥、近仁。（子路第十三・二七　二六七頁）

子曰わく、剛毅木訥、仁に近し、と。

「木訥」は他に用例はありませんが、辞書的には「木」は「朴」で素朴、純朴、「訥」はことばが「すらすら出ない」こと。「言に訥」です。「顔淵第十二」三の「訒」に類似するでしょう。「近い」というのは、そのこと自体は「仁」に充分な条件であるわけではないからで、何か比較対象を意識し、それより「仁に近い」わけです。比較対象が「巧言」である可能性は高いでしょう。「言に訥」でなく「巧言」になることで、「仁」が「鮮」くなってしまうのです。「訥」に「朴（木）」が付くことで、対照される「巧」の帯びる作為性がより明らかになるでしょう。

次は、「巧言」否定と同類と見てよい発言です。

或曰、雍也、仁而不佞。子曰、焉用佞。禦人以口給、屢憎於人。不知其仁也、焉用佞也。（公冶長第五・五　八五頁）

或るひと曰わく、雍や、仁にして佞ならず、と。子曰わく、焉くんぞ佞を用いん。人を禦ぐに口給を以ってすれば、屢々人に憎まる。其の仁なるを知らざるも、焉くんぞ佞を用いんや、と。

弟子の冉雍についての「仁」だが「佞」でないという評価を聞いた孔子が、彼が「仁」とは知らないと断りつつ、「佞」の必要性を強く否定しています。「仁」は出てきますが、ここではそれは「佞」と関わっているわけではありません。

「佞」は、文脈からすると、「或るひと」にとっては肯定的な状態で、『新字源』によると「弁舌がたつ」「口がうまい」という意が記してあります。一方、『論語』で孔子は何度か「佞」を否定する発言をしています。ただ、この語が辞書の言うようにことばに関わる表現であることを感じ取れるのは以下の一例だけのようです。

子路使子羔為費宰。子曰、賊夫人之子。子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必読書然後為学。子曰、是故悪夫佞者。（先進第十一・二五　二一八頁）

子路子羔をして費の宰たらしむ。子曰わく、夫の人の子を賊す、と。子路曰わく、民人有り、社稷有り、何ぞ必ずしも書を読みて然る後に学ぶと為さん、と。子曰わく、是の故に夫の佞者を悪む、と。

弟子の子路が別の弟子の子羔を費の町の宰に任じた際、仔細は不明ですが孔子が子羔を損なう行為だと異を唱えます。対して子路が、おそらく孔子が弟子たちに実践と結びついた学びを説いていること（玉木、二〇一〇、四～一四頁）を持ち出して反論します。してやられた孔子は、その子路を「佞者」と評しているのです。これは、自分をやり込めようとする子路の弁舌のあり方を評していると見るのが妥当でしょう。口吻に日頃からの「佞」への嫌悪がよく表れているでしょう。

「佞」がそのようなものと認められれば、それへの嫌悪は「巧言」に対するものと通じるとみなせます。

以上、ことばが行動を伴わないことを嫌う孔子が、ことばに対して慎重な態度を取ることを重視していたこと、従って巧みなことばを発することに対しては嫌悪感を持っていたことを確認できました。

一・三・三・四　外貌に対する態度

「令色」の用例は他にありませんが、「仁」に関わって「色」に言及される発言があります。

……子曰、……夫達者、質直而好義、察言而観色、慮以下人、在邦必達、在家必達。夫聞者色取仁而行違、居之不疑、在邦必聞、在家必聞。（顔淵第十二・二十　二三九頁）

……子曰わく、夫れ達なる者は、質直にして義を好み、言を察して色を観、慮りて以って人に下り、邦に在りては必ず達し、家に在りても必ず達す。夫の聞なる者は、色は仁に取るも行いは違い、之に居りて疑わず、邦に在りては必ず聞こえ、家に在りても必ず聞こゆ、と。

「達」者と「聞」者を対照して述べています。その詳細は置いておきますが、「聞」者について「色は仁に取るも行いは違い」と言うので、どうやらやや否定的なよう

です。

「色は仁に取る」はわかりにくいですが、「色」と「行」、「取」と「違」が対置と理解されますので、行いが「仁」と違うけれども、「色」、見た目の表情はさも「仁」らしいということのようです。「言」でもそうでしたが、実行が伴わないうわべの表出を嫌っているのは共通していると見てよいでしょう。

一方、評価の高い「達」者は、「言を察して色を観る」のだそうです。別に、君子に仕える者の三つの過ちを述べた発言にも、「未だ顔色を見ずして言う、之を瞽（盲人）と謂う」（季氏第十六・六　三三二頁）というのもあって、「観色」が重視されていることが分かります。次句の「慮りて以って人に下る」も含め、他者の言や表情をうかがって言動するので、相手への迎合へとつながりそうな気もしますが、「達」者は「質」が「直」であり、「義を好む」わけですし、今見た「聞」者への言及を合わせて考えれば、迎合的な態度を言うのではないことは明らかでしょう。あくまで相手への「慮」の態度なのだと理解すべきものなのです。

加えれば、次の発言は、真情の表情への表出の難しさを言うようですが、それも真情と「色」との一致を重視すればこそのことでしょう。

子夏問孝。子曰、色難。有事弟子服其労、有酒食先生饌、曽是以為孝乎。（為政第二・八　三九頁）

子夏孝を問う。子曰わく、色難し。事有れば弟子其の労に服し、酒食有れば先生に饌するを、曽ち是以って孝と為さんや、と。

「孝」について問われ、進んで労働したり、年長者に酒食を勧めたりすること、もちろんそれは「孝」ではあるのですが、それだけで「孝」とはみなせず、「色」が難しいのだと言っています。行動をそれにふさわしい「色」に表せてこそ真の「孝」なのです。

用語的に関係は認められませんが、先ほど「巧言」の検討の際に引用した「子路第十三」二七の「剛毅木訥、仁に近し」を参照すると、「剛毅」は外貌に表れるものと必ずしも限定できないかもしれませんが、「言」と並置され、「言」に添えられた「朴」の意味合いをこちらも帯びている可能性は十分ありますから、「令色」と対照的な態度と理解することはできるでしょう。

以上、真情と「色」との一致を好み、それを読み取ることで他者への配慮を重視する孔子は、行動を伴わない、作為を帯びた「色」を嫌悪したようでした。「令色」はそのようなもののひとつだったと思われます。

一・三・四　「学而第一」三のまとめ

以上、これまでに見てきたことを簡単にまとめます。一・三・三・一によれば、「仁」とは、社会規範に照らして自身の判断を制御し、他者が好ましいように思いやりふるまうことを核心としていました。一・三・三・二と一・三・三・三での「巧言」、「仁」とことばとの関係の検討からは、ことばが行動に伴わないことを嫌う孔子が、ことばに対して慎重な態度を取ることを重視していたこと、従って巧みなことばを発することに対しては嫌悪感を持っていたことを確認できました。また、一・三・三・四で、真情と「色」との一致を好み、それを読み取ることで他者への配慮を重視する孔子は、行動を伴わない、作為を帯びた「色」を嫌悪し、「令色」はそのようなもののひとつであろうとみなしました。

さて、では、真情や言動と一致しない作為的な「巧言令色」が、なぜ、社会的規範に照らして自身の判断を制禦し他者を思いやるという「仁」に乏しいことになるのでしょう。「巧言令色」は、自身を飾って他者を欺き、実際より高い評価を得ようとする行為と考えられましょうか。ならばそれは、社会規範に従って自身を制禦すること、また、他者を思いやることと相反する態度であることになるでしょう。とすれば、「仁」を「他者を愛する気持ち」とした加地訳が、「巧言令色」について「実は自分のためにというのが本心であり」と補っているのが、『論語』の孔子の発言をよくふまえていると言えましょう。

さほどかわりばえはしませんが、最後にこの章の試訳を掲げておきます。

先生が言った、「（実質のない）巧みなことばとよくみせかけた表情は（自己本位のもので）、少ないことよ、他者への思いやりは」と。

注一　玉木尚之「『論語』講読のために―方法と「学而第一」一の解釈」（「高知大学教育学部研究報告」第七〇号　二〇一〇）

注二　『論語』（金谷治訳注、岩波文庫、一九六三第一刷、一九九九改訳第一刷）

注三　『角川　新字源』（小川環樹・西田太一郎・赤塚忠編、角川書店、一九六八初版、一九八五第二三九版）を主に使用。選んだ理由は特にはありません。また、『大漢和辞典』（諸橋轍次、大修館書店、一九五九初版、一九八六修訂版第二刷）

注四　他に参照する訳注書

宇野哲人『論語新釈』（講談社学術文庫、一九八〇）ほぼ南宋・朱子の解釈による

貝塚茂樹訳注『論語』（中公文庫、一九七三）

加地伸行全訳注『論語　増補版』（講談社学術文庫、二〇〇九）

木村英一訳、注『論語』（講談社文庫、一九七五第一刷、一九八〇第四刷）

吉川幸次郎監修『論語』（全三冊、朝日新聞社、一九七八）

吉田賢抗『論語』（明治書院、一九六一）